

非学問的な、余りに非学問的な（その三）

長尾史郎

一
（大なる軽蔑は大なる接触到宿る）

本に職業上携わる人々（広義には筆者自身も入る）に、本に対する言い知れぬ軽蔑——少くとも軽視——を見る
ことが多々ある。

二

（Non-articulate）

人は、情動の真底を音声に出すときは、声帯より下で発声し、したがって、獣の咆吼に似てくる。これが交わると、声帯でいかに補正しても覆い隠すべくもなく心底が現れる。

この状態には、一種のカタルシス——少くとも緊張の緩和——があるらしく、病氣や強度の苦悶に際して唸るのはこれと関連するらしく思われる。

最近少し気になるのだが、女性——そして、一般に若い男女——が、顔を上に向けて笑うときには、この発声——発音——モードにあるらしく、気管支の空洞にこだまする風が見えるようで、じっと堪えつつ聴く。

三

(本末)

人が「人格者の先生」だとか「あの医者は人物だ」とか言われたいと思う場合の危険は、「人格者」か「人物」か知らないが、とにかく「先生」や「医者」になつてしまふことである。しかし、その場合、世間は別に爪弾きはしない。……むしろ危険はこの「人格」や「人物」とはそもそも何だろうと考えだすと、「本末顛倒」がおこつて、もう、本来の先生にも医者にもなり難いところまで行くことである。そこまで行かない「節度有る」例は（その方が多い？）——それは、by definition (?), 考えが真剣でないだけのことだ。

四

(英和辞典の若干の欠陥について)

全部調べた訳ではないから、ほんの思い付きであるが、学生が英語を読んでいて良く躓くのに、例えば次のようなものがある。

(1) not any——中学以来、「any は some の否定」などと習つた後遺症がある。any はあくまで「任意の」ということで、(not any X) ≡ (X) じつまり「任意の X を否定するから」≡ (no X) になる。

(2) available——「有効な」等々は、源義から来た、物理学（例えば熱工学？）などの用語。あくまで意味は

「利用（入手）可能な」。

(3) In turn——私はこれをいつも、論理的 sequence (A B C) の B のことだと説明する。この点が明確な辞書は少ない。

五

（教育における怒りの意味）

教育上、怒りは有害なものときれ、「冷静」に論ずることが賞揚される。「体罰禁止」も、これが感情的行為と目されるのが大きな要因となっているようである。私はどうしてもこの点が理解できない。感情で裏打ちされないような行為に説得力があるのだろうか。

むしろ問題はもっと別の点にある。それは教育というものの本質に関わることであるが、怒りがいけないとすれば、それは、そもそも、自分を叱るに値しないと思っでいる人から叱られるからである。そして、叱られて腹がたつ時は師を代えれば良いのだ。だから本来の問題は現在、師を選ぶという志向も可能性も無くなっていることにある（義務教育から始まって、大学の「義務化」まで）。こういう条件が、主体的、制度的に整ってなお、叱るといふ「感情的」行為が有害なことが明らかになれば（その可能性はある）その時に改めるべきであろう。もっとも、現にそういう体制にないのだから、「怒り」は悪とされるのは止むを得ないとは言えるし、だからこそこの現状がある。

六

六

(三要素)

事毎に自慢する者、口癖のようにダメなんですと言う者、少し踏み込ませようとすると、「ドツチでも良い」といって外れる者が居る。

人には、この三つ——自負、自己卑下、諦念——が三つとも、何がしか、——否、恐らくその莫大量が——必要であろう。しかし、この三つを、一つずつ、八犬伝の玉よろしく、小さいのを一つずつ後生大事に抱えているのを見ると、本当に、空威張り、ダメ、根無草でしかないと思う。

七

(話の吸い取り)

聞き上手は、自分を抑えて相手に余地を与えることなのだが、これは、それほど単純なことではない。

高校の時、実感の湧かないことの一つだったが、例えばげんこで障子を破る場合にも作用反作用の法則が働いているという。これと同じで、相手の話を惹き出すには、常に、この障子紙のような「反作用」を供給し続けなければいけない。これを止めて、真に「聞き上手」に徹すれば、相手は真空中に吸い取られた想いで、言葉もない。

八

(表現の楽しみ)

井戸端会議のレベルで、子供の遊びを見て母親たちが感嘆して叫ぶ。

「あんなことに興味があるのね。」

「そうね、キョーミがあるのね。」

この場合、この感嘆の内容であるが、もちろん、第一義的には、目にした現実の驚きをこの言葉で表現した点にある。だが第二に、この言葉で表現した点にある。だが第三に、この言葉を使ったという点にある。

恐らくもちろん、この三つが共に渾然一体となったものではあるが、実は、第三のものが決して無視できない比重を占めていることが考えられる。現に、この上滑りの時代に互いに相手を繋ぎ止められるのは「共通語」

——例えばコマースシャルで今流行っている言葉——くらいであり、その言葉によって表現される内容の方はミニマムの比重しか与えられない。これは一種の「認識標」の役すら果たす。

これが、「下世話」のことだと思ふのは間違いで、もっと、sophisticatedなレベルでも生じ得る。

「これは、限界効用遞減だ！」

と言う時、右の井戸端会議の三要素（三レベル）が容易に認められよう。そして、第二点は、特に、一般法則を「適用」したという形態を採るだろう。この場合、「適用」には学問的全矜持が籠められている。なぜなら、それは個別的事例とは区別された一般法則であり、そして、個々の適用によってその implication の豊富さを示すことができるのだから。

しかし、もちろん真の implication とは、事例の列挙という些末事ではなくて、その概念の演繹的展開能力である。それは、経済学なら経済学的全「体系」が保障していてくれる。だから、全努力は、その key word まで、そ

の街道まで、藪かき分けて辿り着くことに向けられる。その街道で一息ついて、どっちハイウでも待つ時の安堵の色は、右の井戸端会議の第三の要素と似通わないだろうか。そしてもちろん、同じ認識標と同じ相言葉を持つ集団の共謀の喜びでもある。

九

(Marginal attack)

人が人を攻撃する(物理的および精神的には、余程の覚悟が要る。そして、余程の覚悟は余程の事が無い限り人は持たないものであるのに、攻撃だけはしたがる動物だから、勢い、攻撃は、margin に対する——marginal な——ものになる。だから逆に、防禦の極意はこの margin の採り方の大きさに存する。

これは可成広く認められた点で、例えば剣術でも、肉を切らして骨を断てと言う時、肉は、並々ならぬものにして、margin と考えられている。また、妖怪の真諦は、いつでも、人間の注意を惹き付けておくものと全く別なところに「本体」が在って、人は無益に「影」の方を攻撃させられることである。一般に陽動作戦はこれの応用で、小は、剣道で小手撃ちを、手をさっさと退けたり、電車でぶつかってくる人を「影」にぶつからせておいて「うっちゃる」のから始まる。

これが精神的な攻撤になると、margin——「影」——の造り方は容易ではあるまい。ひょっとしてニーチェの好んで使う Vordergrund などもこの類かななどと愚考したりする。

(テクノクラシーの必然性について)

支配者も、常に「現場」に目措かざるを得ないのであって、「支配」ということも、「現場」に別のことを押し付けることではなくて、「現場」の流儀でやらせておいて、ただ、その目的およびアウトプットを支配者の「ため」に方向付けることができるに過ぎない。

ところで、「現場」が、この「ため」の部分で「現場」の活動にとって不可欠のものでない——irrelevantだ——と気付くや否や、それは排除されよう。あるいは、排除され得ないという点だけが relevance の総てであるような点が来よう。

一般に支配者と「現場」との関係では、前者は「権威」として、「テクノロジー」としての後者に対するが、しかし、常に前者が外的で irrelevant だということではなく、前者の権威は、しばしば統治——organizing——としての社会的テクノロジーであり、その意味でやはり「現場」である。だから、relevance を失う権威とは、統治のテクノロジーとしての意義を失った権威ということである。そして、この organization という機能は常に必須であるから、一つの権威が打ち倒されれば、必ずず別の権威がこれにとって代わる。ただ、常に「現場」にマッチしたものでなければならぬ。「権威」が自分に合った「現場」を追求することは常になされようが、もちろん、逆の方がより「客観的」ないし「自然的」である。だから、貴族社会から中世への移り行きなどは、最初のテクノクラシー運動と解し得る。

十一

(軍隊で言えば)

将来、社会の「下士官クラス」は圧倒的に女性が占め、男性は兵卒か将校かに分極するのではあるまいか。

十二

(比喩の効用)

処生訓は、なぜ、圧倒的に喩え話に頼るのであるのか。——だが、少し昔の文献では、比喩を論証に換えているのがいくらかもある。哲学的傾向のものはほとんどそうだ。

十三

(現時点で)

幼児の用語で、時として、「これ嫌い」と言う。その意味は、それを鱈腹食べてしまって、只今のところ限界効用ゼロないしマイナスだということなので。

十四

(SFの誤算)

ジュール・ヴェルヌやツィオルコフスキーの洞察、予言は、驚ろくべく正確だと言う。そして、現実に宇宙時代

が始まる前に、SFは映画でも稼いだ。そうしたものは、右のようにそんなに誤っていなかった——ただし、他の天体の生物の話を除いて。では、どこでSFが誤ったかと言うと、プロジェクトの社会的位置付けという点で。甚だしいのになると、パトカーに追われて打ち上げ基地に跳び込んで、手に手を取って宇宙へ脱出などという映画がある。現実には、地上最大の国家が全力を傾けて、鳴り物入りで宣伝して、秒読みを繰り返してやっと御出立である。畢竟、SFも Social Fiction には成り難いということである。

十五

(パターンのコミュニケーションとしてのコミュニケーション)

人が伝達し合うのは、常に、事柄そのもの、内容そのものというよりは、むしろ、それを盛って差し出す「パターン」の方らしい。例えば、ある内容を伝えようとする、相手は、その内容でなく、それによって感じられるエモーションの方をむしろ重視する。逆に、あるエモーションを伝えようすると、それを伝えた形式の方を感じ取るという具合である。そして、当然ながら、伝達者の意図ではなく、こうして受け取られたパターンに対して、同じパターンで反応（同意ないし拒絶）する。

私は、この点で絶望を感じないことは稀である——否、皆無といって良い。

パターンのコミュニケーション

十六

(パターンの学習としての模倣)

人真似は、猿や小供に始まって、非常に深いところで、成人まで含めて人間の行動の根本的一特徴となっているようである。

「真似る」というのは、他人と「同じ」ことをすることだが、それは不可能に決まっている——第一、主体が違い、対象が違い、時間も空間もオリジナルとは異なっている。にもかかわらず、「同じ」ことをしようと志向すると言うのに、それだけの意味があり、また、なぜそういう志向が生じるのだろうか。

ここで、同義反復に陥る、ないしはそう聞こえることを恐れるのだが、人真似——模倣——は、本質上、パターンの学習である。

パターンということは、本質上、そのパターンに担われる内容、情報、等々が別にあるということを含意しよう。だが、その内容——と思われるもの——を把握、表現、等々しようとする、それは直ちに、また新たなもの——多分、より「深層」の——パターンに転化するのである。ちょうど、「物質」の本質はどこまでいっても「実体」に行き着かないのと似た事情にある。

とすると、パターンは、「現実」、「真実」、「事実」等々の「歩手前のものである。後者と「同じ」ことを真似るのは不可能だが、パターンなら「同じ」パターンを採ることができであろう。もちろん、真似る側の真意としては、パターンでなしに「現実」を真似るつもりが、結果は常にパターンの模倣に終わるのである。

「志向」については、今のところ、「本能的」な好奇心しかどうも考え付かない。

保育園帰りの子供を連れて、橋の手摺りに凭れて立って眺めやりながら足を組んでいて、ひょいと隣を見下ろすと、子供が全く同じ格構で立っていたので、噴き出してしまった。

十七

(嘔吐)

私には確かだと思われることが一つある。それは、江戸時代人が現代に生き返ったら、生活の中の工芸品の余りにお粗末、がさつ、粗雑、投げ遣り、貧弱さに、嘔吐をもよおすに違いないということだ。現代人には居直りもあって、小まめな手作業が出来ないことを認める代わりに、「抽象芸術」的な味だといって手抜き細工を提供するのだ。さらに、一般に、物事の永続性を信じなくなったただけでなく、それを低く見る価値観を育んだから、例えば、ブロンズ製品の自然の緑青を持ち切れずに、ペンキで色を出す。私の思うに、昔は恐らくびかびかの製品を入手し、それに手沢をかけるうちに鈍い錆が付着したものだと思う。

近頃は「工業デザイン」の問題が騒がしく論じられているようであるが、問題の一端はデザイン自体というより、直接的製造過程にもあるのではなからうか。つまり、昔の手工業的製造過程の手作業では、元のデザインの実現の過程で無数のヴァリエーションと、従って改善——少くとも熟練・円熟——とが生じたわけであるが、自動的・機械的製造では、最も良くてもオリジナルのまま、そして通常は、「エントロピー」の法則で悪化が生じる。(工業的メカニクス——例えば自動車等——については、逆に、「人手」が入るほど悪くなるという面もある。) (田舎に、何も無い中に、一つだけ古銅の蹲った猪の二、三寸の彫物があって、それをずっと見て育った。鼻面は

擦れて光っているが、あとは黒い。その端線の切れ味の良さは、今でもそれ以上のものを見たことが無いと思いたくなるほど快かった。これが私の工芸鑑賞の基本になったような気がしてならない。最近それを父から譲り受けて少し汚れを落としてみたら、毛並みに白い金属で象嵌してあった。

以前はよく骨董屋をのぞいたものであった（この頃は、少し辛気臭い感じを持つことが多くて足が遠のいているが）。職業柄、人の働いているような時間に出没する、名状し難い人物を見て、向こうは、てっきり同業者とすることが多いらしく、非常に突っけんどな応待をされて心外なことがある。きっと、私の目付き、物腰が案外、「様」になっているのであろう(?)。

十八

(私と読書)

自分の読書量の少なさは呆れる程である。高校生の時(まで)に「読んだ」と言えるのは、倉田百三の『愛と認識との出発』だけと言ってもよいくらいである。ここからは、主に、「匿名性への情熱」、日本的(?)フェミニズム、そして、一種の「形而上」的雰囲気を読み取ったように思う。このどれも、その後の私に多大な影響を与えたし、今でも与えているものと思うが、他方、倉田百三をもう一度読み直したいとは少しも思わない。

その後「読んだ」ものと言えばニーチェだけと言える。

(自愛)

自分は、主義としては、利己主義に反対だったし、今でも別に変わりはない。しかし、大學生活も半ば頃、自分の實際が、自分でも恐ろしいほど「利己的」なことに思い至った。そして、これは、「主義」などというレベルの話ではないし、その前後の私とも別に撞着するものではないことも知った。そして、私は徹頭徹尾「自愛」しているが、それと、「自滅型」の衝動的振舞——時として私を襲う——とが矛盾するとも思っていない。

(物心)

大学に入ってしばらくしてだと思ふ。或る日、あ、自分は今まで何んにも知らなかったんだな、という想いが突然した。

(自己責任)

自分がその原則に耐え得ているかは別として、私のライトモチーフの一つは、「自己責任」ということであり、これは非常に初期から私の情動の基本を成していただようである。その端初の年代は特定できないが、例えば、中学生の頃、近所の幼児が誰かが、私の家の劇薬(?)を口にすると聞いた事故が起きた(大した結果を惹き起こしは

しなかったが)。そのとき私は、それを、「自分が氣を付けないのが悪いのだ」と、口に出して評言した。これを聞いた家人が、私の「冷酷」さに頭に来て殴り飛ばしたものである。しかし、その時も今も、私は私の正当さをほつきり意識していた(いる)。

二十二

(Ideal-Typus)

他人のつつじの木が余りにほったらかしにしてあるので見るに見かねて剪定してやったことがある。周知のように、あれは球の表面(半球面)のように仕上げるものである。終わつた晩に、本当に透明の物質で出来た、そして、球面というより、無数の面を持つ正多面体のように仕上がり、そして稜線に水玉を散り嵌めたようなつつじをありありと夢に見た。(geodesic dome と言うのだろうが、とてもそんなありきたりの美しさではなかった。)

二十三

(Les misérables)

人が「残酷」を感じるところで、私はむしろ惨めさを感じる――まずその加害者に、次いで被害者に、次いでそういう状況全体に、そして、そういうものを見聞きさせられる自分に。「残酷性」は、その構成要素に過ぎない。

(わが心の故郷)

かつて文学は(といってももちろん訳本でだが)ロシア文学の方を多く読んでいた時が在って、映画なんかでも、アメリカよりもロシアの風俗の方をより懐しく思う程になったことがあった。従って、私の交友なども、あの懐しい十九世紀ロシア的雰囲気はどうしても規準に出してしまうのが内心避けられない。遠くから友を訪ね、およそ一月は下らない単位で「逗留」する。屋敷家屋は広大で、「客人」はその中に粉れ込んでしまう。好きな時に起き、飯を喰い、ウォッカやクワスを飲み、白樺の間を逍遙し、百姓娘をからかい、昼寝をし、……
 こういう気持で日本で振舞うと、二ヶ月を待たず一日で叩き出されるのは必定である。

二十五

(閑暇感覚)

私といえども小学生の頃、戦後の食料難時代に両親の拓いた開墾畑まで小一里、リヤカーに野羊の下肥えを積んで、じゃが芋やさつま芋作りの手伝いをしたものだ。といっても、まだ現在よりも比べものにならないくらい忙しかった農家から見れば、基本的には「閑人」だった。

農村にいて農家でないという経験をしなければとても分からないであろうが、田んぼで働く人々の脇で暇だといふことには独得の後ろめたさが伴う。むこうには、「農本主義」の名残りもあって、「勤労」という正統性がある。だから、こちらにも常にそれなりの情動的・合理的備え(構え)が無ければならなかったのである。

母などは（小学校教師であった）よく、「あれだけの土地があったら、もつとずつとうまく経営してみせる」と言っていたが、母の発明の才と勤勉をもってすればもちろん、それは額面どおりの言葉だが、その裏には案外、少くとも意識下に、右のような配慮が働いていたのかも知れない。

二十六

（いちいち一から）

人と人との間には、「趣味」、「相性」、「行きがかり」、そして何より、有りと有らゆる種類および程度の「ランク」の差異があつて、誰もが誰とでも対等の付き合いに至れるわけではないということはほとんど自明だ。そして、人はふつう、この事実を踏まえて、かつ、「能率」を上げるために、自他の「ランク」を見計らつて、スケールの適当な指度を採つて、それを出発点にして「逐次接近」にとりかかる。

私はふつう、相手の態度を「原点」、というより、むしろ1に採つて、私の方も1と考へて始めるのを常とする。そして、「昔気質」の対等の作法にならつて慇懃を示すと、現代の感覚では〇・八〇〇・六程の感じになる。

これがあらぬ誤解の種にならないことはほとんど稀で、あるいは軽蔑——これが圧倒的に多い——、怒り——これは潜越を叱るので——、はては「懸想」(!?)にまで及ぶ。

こういう毎度のやりとりで心底倦み疲れることが多いのが実情なのだが、それでも飽きもせず、またまた1から始めるとは、いったいどういう物好きなのであろうか。

(徘徊癖)

例えば『国富論』の索引で引用箇所を探す。大体見当が付いてくる——すると、わざと、その「周辺」を検べ出す。そしてどうにも出なくなると、その最初に分かっていた(はず)の所にやっど行く。

英語の文を読んでいても、ある key word の意味がウロ覚えだから、それを調べれば解る(はずな)のだが、それを(意識下で)必死に抑えて、その単語が解ったものとして解こうとする。そしてどうにもならなくなつてついにその単語を調べてめでたしとなる。

こういう(ばかばかしい)性癖は至るところで variation をもって現れるようで、例えば物を見るときもそうで、本来見るべきものを(わざと)焦点から外して見る。また、対人関係でも、本来必要な「措置」が分かっているのに、その「代わり」や「中間段階」ないしは「ほのめかし」をやっている。そして、どうにもならなく、余儀なくされると始めて、それに焦点を当てて見、またその行為をする。そして、そうなった時には、ふつう、それは強過ぎる行為になっており、あるいは「凝視」になったり、あるいは断固を通り越して、「冷酷」と評されたりする。

もつとも、前段で言った索引調べや英文解釈の方はカミソリのようにには行かないのが残念だが。

(心赴く所)

他人にそもそもこの区別の自覚が大なり小なりあるものか、また、実際の行為において、この両者にどれほどの

比重が割り振られているものか、私は知らないが、私は自分において明確に感じ取ることができる。その区別とは、自分が emotion に動かされる範囲と、それは「尽き」て、単に、打算、計略、つけ込み、「教育的配慮」、赫し、等々の配慮——要するに「悟性」の働き——および「情性」、「活券」、強制、等々で行動する領域との区別である。

私と云えども、後者なしでは済まないし、済まないことも分かっているが、その面は少ない方が良いと思つてゐるし、実際、非常に少ない方だと思つてゐる。しかし、何より、この区別の意識を曇らさないことを重要ではあるまいか。

二十九

(怒りの島)

J・ヘラーの『キャッチー22』に、米軍幹部候補生クレヴィンジャーが意味もないことで軍法会議にかけられる場面がでてくる。彼は、ファシストと言えども、誰一人として、この同じ国語を話し、同じ軍服を着た人々ほど憎しみを自分に抱いている者は居ないと感じる。

振り返れば、これまで私も、一投足毎に誰かの怒りの発作——というより噴火——に吹き飛ばされないように、噴火口や地雷を避けながら足探りでこの地点までやってきたような気がする。しかも、その怒りたるや、堀越しの枝から柿を盗んだガキ大将を怒鳴るといふ「良性」の怒りではなくして、極めて陰に籠もった悪性のもので——つまり、これは相手ばかりか当人も蝕む、というより、その病巣から発したような憎しみの発作なので。

自分に一つの白昼夢がある。「紙くず爆弾」の話で、道端に何でも無い紙くずやぼろ切れが落ちている。それを踏み付けると、突然爆発して、私は木端微塵に吹っ飛ぶ。

三十

(肥料)

学生時代、黙々と弁当を使っている友人に、何か気のきいた冗談を言うつもりで、「養分」とか「栄養」とかいふ言葉を発するつもりで、ニコニコした私の口を衝いて出たのは、——「肥やし」であった。びっくりしたのは相手よりも私の方だった。

三十一

(嫌味の素)

表情でもそうだが声の調子で「嫌味ったらしい」のがある。では、どういう調子がそうかとなると、その定義はかなり難しいものになる。だが、一つだけ必要条件と思しきものがある。それは、自分で自分の声を聞き、かつ、その声の他人に与える効果を計りながら話す場合である。なぜこれが「必要条件」になり得るかという点、問題は振り出しに戻るようなものだが、それは、その結果として、言葉(声)と発声者自身、ないしは声とメッセージとの間に「遊び」が入るからである。逆の場合には、この両者の関係が「必然的」だとまでは言うのではないが、少なくとも他の可能性を排除するに十分なほどに「密着」してはいる。